

ウェルナー・ゾムバルト

一 経済学の諸傾向とゾムバルト

はじめて経済学を学問的に研究していこうとするひとびとにとって、経済学にいろいろの傾向があり、学派があつて、いうことがそれぞれ相当にちがうということ、はなはだ困つたことだと受けとられる。初学者のため入門書自体が、ある特定の学派に属しているとすれば、それを勉強しても、ある他の学派の説で誤りとされるような学説を身につけてしまふかも知れない。そういう心配がいつでもつきまとう。このことは、実を言えば何も初学者のみに限られることではなく、相当の研究を積んだひとびとの場合でも、事態は根本的には同じなのだ、初学者の場合には、一時に全部の学派の特徴をつかむことができないのだからなお一層痛切である。これ

木村元一

について山田雄三教授はつぎのように注意しておられる。非常に適切な言葉なので引用させていたたくと共に、引用文の書かれてある『経済学の学び方』（白桃書店、昭和三年）という書物を初学者に推薦したいと思う。いわく、

「……経済学を学ぼうとする人々が、経済学にいろいろな立場やいろいろな学派がたがいに対立しているというところにきわめて強く印象づけられて、どういう方向に沿って進めるべきかに思い悩むと思われる……。しかしそのような対立というのは、実はただ表面的に考えられているに過ぎないことが多い。内面的にはいり込まずに、ただいろいろなレットルだけをならべても、真の解決は得られない。……学問の途ではいわず自分の嗜好——正しくいえば自分の視野（ホリゾン）

——を高めていくことが大切なのである。それには、いずれの方向にせよ、そのなかにはいり込んでいかなければならず、内面的に経済学の発展のなかにはいり込んでいけば、課題なり方法なりについて次第に整理も行われ、幾つもの経済学があるはずがないこともわかるのである。もちろん……知識開拓の前線にあっては、多少とも意見の分裂があるのが常であろう。しかし、そういう経済学の前線を理解するためにも、われわれはまずいずれかの方向の経済学のなかに飛び込んでいくことが大切であり、さらに一つの方向に固執することなく、自分自身のホリゾントを拡げていくように心掛けることが大切である。」(前掲書四—五頁。傍点筆者)

ところで、この『経済学の学び方』では、経済学の潮流を大きく三つにわけて諸学派の主張の内容と文献の解説をおこなっている。その三潮流とは、第一が近代経済学の潮流、第二が社会主義経済学の潮流、第三が制度派経済学の潮流である。おのおのの潮流のなかにさらに主流あり支流あり、まことに多種多彩であるが、これから

解説を加えようとするウェルナー・ゾムバルトの経済学は、この分類でいけば、第三の制度派の経済学の潮流に属する経済学である。

わたくしの理解するところでは、制度派経済学の特徴はつぎの四つにまとめることができる。第一は歴史の重視ということである。この点は、どちらかという则需要と供給、生産と消費、貯蓄と投資等々の関係を均衡論的に把握することに主眼をおく近代経済学の行き方とちがう点である。第二に、制度派経済学は、経済を営む人間を、できるだけ制度の制約を受けたものとしてつかもうとする。人間を制約するいろいろな制度的原因のうち、どの要素を重要と考えるかは、ひとによって異なるが、人間を利害の打算に堪能な貨幣的計慮に長じた合理的なものとのみ見ることには満足せず、社会の中で生成発展する全人格において把握しようとする。この点が近代経済学と異なる第二の点である。第三に、上記二点と密接に関連するが、理論的な近代経済学が、現実作用する多数の経済的制度的諸要因のうち、若干の要因を抽出して、それらの要因の間の因果関係もしくは相関関係を確定することを主要な任務と考えるのに対して、制度派の

経済学は、それだけではわれわれの経済生活を本当に認識した事にはならぬと考える。ここに経済社会学的な立場の強調という特徴があらわれてくる。第四に、制度派の経済学を主張するひとびとは、大体において小市民的ないしは中産階級の立場に立っている。すなわちその多くは資本主義の経済制度に多かれ少なかれ批判的な立場をとる。しかしさればといって一部の社会主義経済学のように、徹頭徹尾、資本主義経済の矛盾とその必然的な没落を論証することにも賛成しない。大体において、漸進主義、進化主義、社会改良主義を基調とする。

この意味の制度派経済学の源流は、遠くアダム・ミューラーのロマン主義全体観、シモンド・ドゥ・シスモンデイの福祉国家観、ならびにフリードリヒ・リストの経済発展段階説に発するが、今日の制度派経済学は、ドイツに展開した歴史派経済学とアメリカの制度学派の二群に分かつことができる。もとより両群の間には密接な交流が認められるとともに、時代と国情を異にするにつれ、学説の内容に差異がある。また学者の個性の差異、問題意識の差異にしがたが、学説の体系も異なったものが展開されている。制度学派の経済学は、歴史的・社会学的

認識を強調し、また漸進的改良主義的傾向を基調とするために、理論的一貫性と実践的徹底性とに欠け、ややもすれば折衷的な性格を帯びるように思われているが、しかし単に無節操にいろいろの立場を寄せ集めているのではなく、山田教授の言葉をかりれば、それぞれの学者が「自分自身のホリゾン트를拡張」した結果であり、また自分自身の問題意識を深めていった結果でもあるのである。ウェルナー・ゾムバルトはドイツ歴史学派の伝統のなかで育ち、経済生活の歴史的・社会学的な理解のために偉大な貢献をした巨匠であるが、以下かれの問題意識の深まりとホリゾン트의拡大、それと学説との関連を考察していこう。

二 ゾムバルトの生涯

ひとは環境の産物だといわれる。もとより同じ環境の下にあればかならず同じ人間ができ上るといふわけではないのであるが、人柄や業績を理解するには環境からの説明もある程度まで役立つ。ウェルナー・ゾムバルト (Werner Sombart) は一八六三年中部ドイツ、ライプツヒの西、メルゼブルグ県の小さな町エルムスレーベンに

生れた。父は裕福な地主で、同時に砂糖工場の経営者でもあり、またゾムバルト出生当時すでにプロイセンの国會議員にも選ばれ、のちには帝国議会議員に選出されて、かなり活潑な政治活動もおこなった。少年時代は父の大きな農場で田園生活をおくり、教育は家庭教師から受けたが、十二歳のとき父と共にベルリンに移りそのギムナジウムに入れられた。卒業後さらにベルリン大学に進んだのは、一八八二年、ゾムバルトが十九歳のときである。当時ドイツはビスマルクの指導のもとに、普墺戦争（六六年）、普仏戦争（七〇―七一年）、アフリカ植民地の領有（八四―八五年）に成功を収め、政治的統一を完成して国内産業のいちじるしい勃興を経験しつつあったが、同時に、急激な資本主義の発展にともなって、労資の対立がはげしく、一八七八年には社会主義鎮圧法を制定して、労働運動を弾圧するという状態であった。ベルリン大学では、社会政策の主唱者たるシュモラーやワグナーが教鞭をとっており、資本主義と労働者問題に非常な興味と関心をもったゾムバルトは両教授から多くのものを吸収したが、同時に他方では、マルクスの発展理論にも共鳴し、方法論の上では当時やはりベルリン大学に赴

任してきたデイルタイの精神科学的方法に影響されるころが多かった。

ベルリン大学を卒業してイタリーのピサ大学に遊学し、ローマ附近の古い農業経営形態を研究し、不在地主の搾取下に呻吟する農業労働者の実情とその対策を明らかにした。八八年に帰国して学位をうけ、しばらくブレームンの商工会議所の研究員となった。彼の業績はつとにみとめられていたが、国家主義的な官学の伝統の強いベルリン大学ではその「思想的偏向」がわざわざいして、職を得ることができなかったからである。教職に志して彼の得た地位は、現在のポーランド領プロシヤ（ドイツ名ブレスラウ）の大学助教授であった。そしてこの地に十六年間居住した。しかしこの頃のゾムバルトは「革命家」であり、「ドン・ファン」であり、学生にとっては「理想的な教師」であった。同時に学界では異端視され、教授会では困った教授であり、市民にとっては何か神聖な恐怖の対象でもあった。祖先のフランスの血を享け、南欧的な教養を身につけたゾムバルトは流暢で陽気で無頓着だった。マルクス主義的な傾向をもった著書や論文をつぎつぎに発表したが、かれをして一躍有名なら

しめたものは、一八九六年スイスの文化協会での講演をまとめて出版した小冊子『十九世紀における社会主義および社会運動』であった。それはいくたびか版を重ね二十数カ国語に翻訳され、のちに『プロレタリア社会主義』と『ドイツ的社会主義』という二冊の大作に成長するはずのものであった。

このほかプレスラウ時代の労作でもっとも注目されるべきものは、一八九七年の論文『社会政策の理想』と、一九〇二年の著書『近代資本主義』であろう。前者は社会政策の学問的根柢を衝いたもので、のちに『三つの経済学』という経済学の方法論に関するゾムバルトの有名な書物にまで拡大されることになった。また後者は、その他の基礎的な研究と相まって、のちに『近代資本主義』三卷六冊の大作に成熟するものであった。

長いプレスラウの生活にいとまを告げてベルリンにもどることになったのは、一九〇六年かれが四十三歳のときであった。もうその頃は創業の元老ビスマルクが失脚してウィルヘルム二世（一八八八年即位）の時代に入っている。一方では独逸伊三国同盟の再三の更新がおこなわれ、他方ではイギリスは南阿戦争に忙殺され、フランス

は与国ロシアの日露戦争における失敗によって勢力を殺される等の世界状況の変化があり、内には重工業の隆々たる発展と社会不安の相対的な解消がみられる時代でもあった。しかしゾムバルトがベルリンにもどったとはいっても、職を得たのは新設の商科大学（学位を授与する権限のない）においてであって、母校に招聘されたのは、アドルフ・ワグナーが死去した一九一七年のことであるから、商科大学には十一年在職したわけである。ゾムバルトに有力な後継者がでなかったのは、ひとつにはかれの学風が容易に追隨をゆるさぬ芸術家的色彩に富んでいたからでもあるが、プレスラウ大学や商科大学における卒業生で教職につくものが少なかったこともあるかと思われ。

ベルリン商科大学在任期の業績としては、『奢侈と資本主義』、『戦争と資本主義』、『ユダヤ人と経済生活』などにつづいて、『近代資本主義』の第二版の上梓をあげなければならぬ。（続巻『高度資本主義時代の経済生活』が書かれたのもっとあとで、初版発表以来二十五年目の一九二七年のことである。）

一九一四年、ドイツは第一次世界大戦に突入し、当初

優勢であったにもかかわらず、四年間にわたる長期の消耗戦に堪えずして、一九一八年ついに降伏の己むなきに至った。戦後の革命とインフレーションのさなかに、ゾムバルトはしばしば「神」をもとめ、マルクス主義のなかに暴力主義を指摘し、ボルシェヴィズムに対する心からの嫌悪を表明するに至った。『商人と英雄』(一九一五年)では、人間類型としてイギリス的な商人とドイツの軍隊的英雄精神を対比し、ドイツ精神の優越性を強調したが、敗戦後の混乱のなかでは神への信仰をもつ国民だけが相互に愛し合えること、単なる商業上の利害関係からは真の愛が生じないと論じた。

大戦とその後の混乱が静まるにつれて、ゾムバルトはふたたび冷静に高度資本主義の叙述の筆をすすめ、一九二七年『近代資本主義』を完成する。そして一九三〇年には、経済学の方法論に関する書物『三つの経済学』を發表した。翌三一年七十歳のゾムバルトはベルリン大学の名誉教授の称号を贈られてふたたび商科大学に移ったが、研究活動は決して衰えることなく続き、一九三四年には『ドイツ的社会主义』を、一九三六年には『社会学』を、そして最後に一九三八年には四六三頁の大冊

『人間について』を發表した。

ナチス・ドイツの軍靴の音の喧しいベルリンで、ゾムバルトが病没したのは一九五一年五月十六日のことであった。

三 人間論(一九三七年)

すでにのべたように、かれの『人間論』は一九三八年の出版で、最後の労作といってもよい。七十八歳の老学者の筆になるとは思えないほど若々しい筆致であるが、扉に「真理はつとに見出されてあり」というゲーテの言葉を書きつけ、序文の末尾ちかくに「いまだ曾つて言われざるものでいま言われるものなし」と古詩を引用し、人間についてはすでに理性的なことがすべていわれているのになお且つここに人間論を展開するのは何故かと自ら問い、自ら答えて「後継者の為し能うことは、事実を見渡して古い思想を自らのものとして述べることであり」といい、碩学の晩年の感想を洩らしている。

人間とは何か、ゾムバルトによれば、それは動物が自然の一部であるのに対し、自然から解放されて存在する、換言すれば、人間のみが、世界を対象化し、自己自

らをも対象化し、抽象化する能力をそなえるものであり、これを一語にして尽せば、「精神」こそ人間をして人間たらしめるものである。もとより「精神」という概念も多義であるが、精神なき人間は考えられない。だが人間は精神そのものではない。人間は、同時に肉体をもつ生物でもある。そこでゾムバルトは、精神と心理とを区別し、人間が人格として精神的統一体を形成し、心理としては生物的統一体をなすこと、前者が後者に対して目的を設定することを認めたのち、目的の設定の自由ということから人間が誤謬を犯し得る存在であること、また絶えず不満をもつ存在であることを明らかにする。

しかしゾムバルトにとって重要なことは、精神が、人間の誤謬と不満にもとづく破壊と挫折を宥和するために、われわれの生の支障なき運行を可能にするような諸形式をつくり出しているということである。人間の生は形式と密接に結びついている。既存の形式に反抗する場合でさえも何らかの形式を要求せざるを得ない。そして精神の形式附与は三つの方向におこなわれる。

第一が秩序である。外部的秩序たると内部的秩序たるとを問わず、われわれ人間の全存在は、秩序の枠にはめ

こまれている。習慣、風俗、法律、宗教的信条等々。第二は精神のつくり出す安息形式である。人間を精神の規則にしぱりつけるためには、安息の場所を提供しておかなければならない。そして自己からの逃避の諸形式がくりだされるのである。自己からの逃避が一番はつきりと現われるのは、人間につきまとう倦怠からの逃避である。このためにどれだけ多くの「あそび」「娯楽」「気晴らし」の諸形式が作り出されたことであろうか。しかしあらゆる気晴らしの欲望が必ずしも満足されるとは限らぬ。そこで楽しみ(ドイツ語で「*Unterhalt*」は楽しみという意味と生計の維持という意味がある)を満足するため「働き」が要求される。だが、単に生活必需品を得るためではなく、「仕事」に没頭し「作品」を作るためにも働く。かくて人間は仕事のために存在するという存在形式を与えられるのである。そして仕事は人間の課題(理念)となる。第三は生に附与せられる仮装もしくは遮光の諸形式である。空腹であってもあらわには空腹を面には表わさずこれを隠そうとする。隠蔽のほか昇華(秘祭、秘儀、愛の詩化等)、洗練の諸様式が精神によって生に与えられる。

人間が社会を形成するのも精神においてである。ゾムバルトによれば、精神のみが人間に特有の結合様式を作り出すからである。動物の群には、精神的な紐帯も、秩序も、体制もなく、外部から作用する力が群生を規定しているだけであるが、人間社会においては、結合する相手は「同胞的人間」であり、結合を媒介するものは、抽象的、客観的な意味（象徴によって指示される）であり、具体的には言葉によってである。言葉こそは人間の社会性を荷なうばかりでなくその歴史性をも荷なうものである。人間の歴史性は伝統（これもまた精神の産物である）によってのみ実現するが、伝統は言語を前提とする。言語なくしては文字なく、文字なくしては後代に語り継ぐ記念碑もない。言語は人間を時空の間に結合するが、この機能はさらに文化の構造に対する言語の重要な役割を暗示する。

ゾムバルトは人間の、したがって精神の創造物をすべて文化と見る。かれは人格に附属する道徳的な性格や知識や能力を主観的な文化と呼ぶが、重要なのは個々の人間の外部に存在する文化——客観的な文化である。意味形態は客観化されて種々様々な形式をとって分岐する。文

化領域とは「一つの理念によって統一された領域」である。たとえば非反省的に超越的なものを体験せしめるわれわれの感性が宗教的な文化領域をつくり出し、敵味方の関係に基礎をおくわれわれの政治的な在り方が国家と法の領域を限界づける。経済もまた一つの文化領域を形成する。それは生計の顧慮、すなわちわれわれの個人的な現存在を絶えず外界自然の事物によって補充しなければならぬという必要性が、経済という文化領域を基礎づけると考えるのである。これらの文化領域はいずれも社会領域を形成するが、宗教や芸術のように少なくとも社会領域を考えずとも考えることのできる文化領域があると同時に、国家とか法の様に社会を度外視しては考えられない文化領域もある。経済もまたそうである。芸術や宗教にも社会があるとすれば、国家、法、そして経済は、社会そのものであると言ってよい。この区別は、シュライエルマツヒェルの区別でいうと、象徴化された文化領域と組織づけられた文化領域の区別に対応する。経済的文化的領域は経済社会でもある。

経済を営むのも戦争によって大きな消耗を取えてしまうのも人間にほかならない。長い学究活動の終末に至るま

で、ゾムバルトの胸中にはこの「不可思議なるもの」人間に科学的な光を当てようという意欲が つづいた。そして到達した結論は、人間が二つの世界に属するということであった。精神とそして自然(肉体)の間の葛藤を内にかかえて、死に至るまでその葛藤と戦うのが人間であり、人間の在り方は、自然的な諸条件に対する精神的本質との争いによって特徴づけられておる。対極的な緊張は、人間のうちなる自然と精神の間に見出されるだけではない。それは、個と群の間にも、遺伝・遺産と自らに課する課題との間にも存在して、本来的に人間の内容と意味を形成する。拘束と自由の間の闘いのうちに人間は自らを確証すべきである。この結論はしかし他面からみれば、ゾムバルトの研究活動の出発点でもあったのであって、かれの経済学が、当初から資本主義機構を前提とした自然科学的な分析にあきたらず、人間の生命と人間の精神の織り成す文化領域としての経済の精神科学的な理解を目指していたことは、さらに以下の説明であきらかにされるであろう。

四 理解的経済学の方法

わたくしの叙述はゾムバルトの最後の大作『人間論』(一九三八年)から始まったが、つきにとり上げたいのは、『三つの経済学』(一九三〇年)である。これもまた晩年の作品であって、すでに述べたように、ベルリン大学を去る直前、かれが六十七歳の時に書かれたものである。

この書物は、副題に「経済の学問の歴史と体系」とうたわれているように、経済学のなかみの問題をとり上げたものではなく、その方法論を展開したものであるが、やはりゾムバルトのそれまでの研究成果、とくに『近代資本主義』論の方法論的基礎づけが主眼であるから、ここでは、かれの言わんとする主張の要点を紹介するにとどめる。

はじめにゾムバルトのいう三つの経済学とは何かということから説明しよう。ゾムバルトによると、これまでに現われた経済学の体系は、(1)形而上学的な規範的経済学、(2)自然科学を範とする、オールドネンテ秩序的経済学、(3)精神科学的な方法による理解的経済学、の三つに大別することができる。

(1)の規範的経済学というのは、たとえば、哲学者フィヒテの『封鎖的商業国家論』のように、理性的な国

家はかくあるべしという理想をかかけ、この理想に照らして国民を農、工、商の三つの身分に数の上で適当に分割し、各人の労働に応じて生産物の分け前を保障する、そのためには、生産物相互の価値と価格を公定するとともに、国民の私的な対外貿易を禁じて自ら封鎖しなければならぬ、と主張するような経済学で、実証性に欠ける経済学である。

(2)の秩序的経済学というのは、経済法則の樹立を目標にする経済学で、これにはアダム・スミス以来のイギリス古典派の経済学や、マルクス主義経済学、限界効用原理に立脚するパレートやワルラスの経済学など、有力な経済学がふくめられる。物理学が因果法則を追究するように、これらの経済学は、経済現象を経済的に合理的に計慮するひとびと、たとえば、生産者と消費者、企業者と労働者乃至資本家・地主の間に生ずる価格現象、交換現象、分配現象とみて、各要因間の相互作用を因果的もしくは後には関数関係的に追及する。ところがこの方法は、人間の文化現象と自然現象の根本的な区別を無視するものだというのが、ゾムバルトの批判点である。木の葉が落ちることは、引力の法則で説明できるかも知

れないが、木の葉が落ちる動機をたずねるのは無意味である。これに反して、利子率の引上が株価の低落をまねくのは、株式所有者と株式の需要者が「資本主義的に規制された」意味的な法則(傾向)に従うからである。盲目的な自然法則に支配されて株価の低落が生ずるのではない。売買当事者の動機を理解するのが先決問題である。それでは、自然科学的な経済学が樹立した「法則」

(傾向)は全然無用かというところではない。あとで説明するように、典型的に繰りかえされる動機の系列のなかから平均的な動機を発見し、因果関係を確定することは、経済学の重要な課題として認めるのである。ただ因果の確定は動機の理解と結びついていなければ無意味だということにすぎない。経済生活を理解するために必要とあらば、自然科学的な方法を合理的な説明手段として利用することは差支えない。貨幣とか交換とか、信用とか景気の変動などの市場問題は、自然科学的な方法で解くのが便利でもあり必要でもある。しかし、生産力の問題や生産部門間の問題や工業立地の問題が問題になってくると、自然科学的な方法は役立たなくなる。いわんや経済学の課題を関数関係の確立や因果法則の確定に尽きると

見るのは、さきにも述べたように、人間精神の客観化された経済的文化領域を理解する所以ではない。

(3)の理解的経済学は、ゾムバルトがベルリン大学時代にディルタイから受けた精神科学的方法と、その後吸収したヴェンデルバンドやリッケルトの文化哲学的方法の影響をうけて、方法論的に特徴づけた経済学である。その内容は『近代資本主義』全巻が示しているのであるが、理解的経済学は、人間が、欲求と充足の不断の緊急のうちに、生命の大部分を費さねばならぬという「経済」の理念から出発する(上述人間論の項参照)。経済を営む人間は、主観的な精神に準拠して、目的を設定し、動機をもち、これにもとづいて行動するが、経済は同時に社会でもあるとすれば、行為が有効に合理的におこなわれるためには、さらに主観的な精神は自らを客観化し、多数の人間を方向づけるものになっていなければならない。ここに精神の形式附与のひとつである「秩序」が見出される。さらに経済では物財の調達が問題であるから、外界の事物を欲求に応じて形成する手段・手続き、すなわち技術が必要とする。すべての経済に、経済心意、秩序、技術が見出される。これらの三者は空

間及び時間を超えて妥当する理性概念であって、いまだ「形相化されざる客観的精神」の段階にとどまっているが、生活としての経済は時間的・空間的に結びつけられた事実複合態として、一定の歴史的な現象のうちに自らを具体化し「形相化された客観的精神」となる。

理解的経済学は、一定の経済心意、一定の経済秩序、一定の技術をもった経済、意味ある統一態としての経済、すなわちゾムバルトが「経済体制」(Wirtschaftssystem)と名づけたところのものを把握しようとするのである。たとえば或る時代の個々の芸術作品や個々の芸術活動がゴチックの「精神」に統一されているような場合に、様式の深い関連が、ゴチック精神から理解されるのと同様に、個々の企業、個々の賃銀契約、個々の取引、個々の簿記記帳は、その意味を統一的な経済体制、この場合には資本主義的な経済体制から受けとる。百貨店の万引の動機を理解するには百貨店が何であるかを理解していなければならない。百貨店の経営形態とその意味を理解するには、全体的な意味連関から出発しなければならぬ。精神は精神によってのみ理解される。精神はあらゆる理解を可能ならしめる全体者である。それぞれ異なる

る経済心理を支配的ならしめ、様式連関を通じて経済的秩序と技術を造り上げるところの精神が、理解的経済学の対象となる。

それではゾムバルトにおける精神は、かつてヘーゲルが唱えたように、人間を犠牲にしてまでも絶えず発展して行く絶対的なものであろうか。あるいは、経済体制は生ける有機体、個に先んずる全体であらうか。ゾムバルトは経験を超える問題に対しては、仮設的に説明原理を工夫してみるだけで、経済体制それ自体の発展を説いたり、精神の自己発展を唱えたりはしない。シュモラーやビュッヒャーやさらに遡ってドイツ歴史学派のひとびとが唱えた経済発展段階説に対してもゾムバルトは批判的であった。なぜなら経済が自然必然的にある段階から次の段階に発展するという考えを、経験的にたしかめることはできないというのがかれの主張だったからである。

ドイツ歴史学派のひとびとは、イギリス古典学派の自然科学的思考方法に反対し、歴史の事実には忠実であろうとしたが、沢山の資料を集め実証的に検討したのちには、普遍的な法則が定立できると信じていた。早急な普遍化に反対しただけで、法則の定立を経済学の窮極の目的と

した点では、歴史学派も自然科学的な思考方法に毒されていたとみるのがゾムバルトの見解であったから、いわんや精神や経済体制や経済段階がそれ自体で必然的に発展すると考える考え方には賛成できなかったのである。

いな、人間論の項でも説いたように、精神は地上においては万能ではない。精神が自己の姿に似せて生命を形相化するには一定の諸条件が要るのであって、すべての文化とひとしく、経済も精神のみから成るのではなく、心理と肉体からも成る。経済行為をなそうとする決意は心理であり、行為の対象たる財貨は肉体である。ゾムバルトがいわんと欲することは、心や肉体が意味をもつのは、精神的な関連、たとえば経営という精神的関連のなかにいてであるということである。経営も一つの客観化された精神だが、あらゆる物と心に先行して自ら展開するというような絶対的な精神ではない。

五 近代資本主義論

わたくしは昭和二十四年に『ゾムバルト「近代資本主義」』という書物を上梓した。そして全巻三、〇〇〇ページを超えるゾムバルトの名著を、僅々四〇〇ページ足ら

ずの紙数で忠実に再現しようと試みた。わたくしの友人のひとりには、この書物を見て「理論的なマルクスの資本論なら要約も可能だが、ゾムバルトの近代資本主義のよ^うな歴史的な描写に満ちた書物を要約するのは無謀ではなかったか」と評した。この批評は一面において肯綮に^{こうけい}当たっている。たしかにゾムバルトは書いている。「従来^の包括的な経済史は、すべて経済法規の歴史にすぎなかった。これに反し、本書は、生計顧慮という経済の理念がいかに現実^に形成されたか、農民と領主、手工業者と商人が、なにを考え、なにを欲し、なにをなしたか、いかに彼らの行動が一般的社会経済の驚異に値する諸事象をつくり上げたか、これを生きた姿で描き出そうとするのである。読者に歴史の豊かさを示すこと、無限の豊富を感じしめると同時に、つねに全体の明瞭な概観をあたえること、これ本書の課題である。……経済生活の活きた描写、これ、本書の目標である。」と。生きた描写を与えようとする書物を要約するのはたしかに無謀である。しかし他面において友人の批評は当たっていない。なぜなら、引用中にもあるように、全体の明瞭な概観をあたえることも意図されていたからである。全体の明瞭な

概観を得るために、理論的・抽象的・体系的な叙述がおこなわれているからである。前項でたびたび指摘したように、「経済体制」の概念が、近代資本主義論の骨組をしっかりと枠づけているのであるから、この意味では、要約することも無意義ではなかったと言えよう。しかし、ゾムバルト自身が嘆いたように、『近代資本主義』論は、しばしば歴史の書物として受とられ、図書館では「経済史」の部門に分類整理され、理論的、抽象的、体系的な書物として受けとられることはむしろ少なかったのである。また経済史の専門書としては、資料の取り扱い方に不備があるばかりでなく、反対資料の検討が不十分であるというので、専門史家からは余り高く評価されないという不運にも遭っている。

単に専門歴史家が文献学的立場から批判したばかりでなく、社会学者はゾムバルトにおける風土派の態度に反駁を加え、経済学者は理論上の欠陥を指摘した。まさしく諸家の間に批判の嵐をよびおこしたとさえいえる。

しかしゾムバルトの偉大さは、むしろそのような部分的な欠点のうえにこそ築き上げられているというのがわたくしの評価であり、また同情者の評価である。『近代

『資本主義』は、普遍史であると同時に体系的な専門書でもある。おそらくマルクス以来ほとんど試みられたことのない資本主義の包括的な取り扱いが美事に成し遂げられている。一定の経済的心意、一定の経済秩序、一定の技術の支配する統一概念としての「経済体制」が歴史的に実現する過程を、ゾムバルトはまことに豪華絢爛たる絵巻物として描き出しているのである。

われわれはゾムバルトの『近代資本主義』を読むことによって、われわれの現在住む資本主義時代の経済秩序と経済心意と技術が、前資本主義時代のそれと異なるといかに異なるか、また、伝統的な自給自足の経済心意の支配した時代から初期資本主義の時代を経て、新しい合理的な心意、営利的精神が高度に展開する高度資本主義の時代にいかに推移したか、初期資本主義期に危機的狀態が現出したにもかかわらず、資本主義の発展を推進した力と技術はどのようなものであったか、そして資本主義の将来はいかに判断されるべきかを知ることができる。

六 社会主義論

ゾムバルトの初期の研究活動が、資本主義よりもむしろ

社会主義および社会運動にあったことは、すでにのべたところである。かれの『十九世紀における社会主義および社会運動』の初版は一八九六年に出ている。その前年には、社会主義者『フリードリヒ・エンゲルス』論が出版され、一九〇〇年には『労働組合運動の理論と歴史』が発表されている。社会主義は、当時あっては、資本主義の胎内に発生した社会運動の精神的沈澱物であり、理念の実現を将来に期待する「主義」であって、近代資本主義のように歴史的に形成された現実の経済体制ではなく、単に理念にとどまるところの未来の経済体制にすぎなかった。社会主義の概念をどのように規定するかということは、資本主義の概念をどのように規定するか、より自由である。

ゾムバルトの社会主義論は、一八九六年当時と、一九二四年の『プロレタリア社会主義』とは余程その内容が異なっており、一九三四年の『ドイツ社会主義』は、プロレタリア中心の社会主義に対して、ドイツ民族に適應的な社会主義のあるべき姿を探究したものである。初期においてはマルクス主義に同情的、いな共鳴的でさえあったのに、なにゆえ次第に批判的になったか、

その理由の大半は、理念としての社会主義が、ロシアにおいて肉体と心を得て現実化しはじめたこと、この現実の社会主義が、ゾムバルトの理想主義と背馳するような展開をみせたことに帰することができると、たしかに『共産党宣言』を「歴史上稀にみる傑作」と讚え、「問題はマルクス主義に反対することではなくて、一層の発展をはかることである」といつていた同じゾムバルトが、のちに『共産党宣言』を「非科学的な煽動的な党派的文章」とけなし、「マルクス主義は下劣な唯物・功利主義と暴力礼讃の破壊的革命的結合」ときめつけるに至ったのであるから、左翼陣営から変節漢よばわりされたのも当然といえは当然だが、しかし社会主義の理念が、ゾムバルトの期待に反した方向で現実化したとすれば、彼の社会主義批判も無理からぬものであったといえるのである。

プロレタリア社会主義は、社会学的には、中世以来の「悲劇的な世俗化」と「フランスの合理主義、すなわち社会秩序の変革によって現世的幸福がえられるとなす合理主義」、心理学的には「怨恨」(ブルジョア出身の社会主義思想家は何らかの意味で栄達の道を塞がれたことに対する鬱

憤の所有者であったとみる。)に基礎をおくというのが、ゾムバルトの見解である。こういう見解は社会主義に対する晩年の無理解を示すものとして一部からはげしく非難されているけれども、さきにも一言したように、ゾムバルトは決して変節したのではない。その初期においても革命主義はマルクス主義に矛盾するものとして批判していたのである。革命の謳歌は「革命は客観的諸条件の成就を俟ってはじめて可能なのであって、任意の煽動によって作らるべきではない」というマルクス自身の基本的態度に矛盾するというのがゾムバルトの当初からの主張であったのである。マルクス主義を進展させるといふのは、ゾムバルトの以て「合理的」となす社会主義への発展を意味していたのであって、階級闘争と暴力革命を肯定することではなかったといわねばならない。

『ドイツ社会主義』論ではゾムバルトはフィヒテ的な社会主義を構想している。かれは資本主義とプロレタリア社会主義のいづれにも批判的である。資本主義時代においては、経済的文化領域が他の文化領域を圧倒してその優位を主張する。その意味で「経済時代」と呼ぶことができるが、ここでは、人間類型でいえば「商人的世界

「観」の持主が、聖者的乃至英雄的心情の持主を圧倒する。宗教的信条が失なわれ、自然の恩寵からも見はなされてゐる。さればとて、資本主義が自然必然的に没落して、物質的福祉に満ちた社会に到達すると考えることもできない。プロレタリア社会主義も経済時代の物質主義精神から生れた迷信にすぎない。必要なことは経済時代からの全面的な転向であり、非物質性、行動性、多様性という特性をそなえたドイツ民族にふさわしいドイツ的社会主義を構想しなければならぬとしている。かくして、資本主義の分析では規範的経済学の方法を排斥したが、社会主義の構想ではみずから規範的な立場をあらわにしているのである。

七 関係文献摘要

ゾムバルトは偉大な学者であった。その所説は資本主義の擁護者からもこれに反対する社会主義者からも注目を浴びていた。その注目は必ずしも学問的なものとは限らなかつた。それぞれの陣営のひとびとがゾムバルトに自己に有利な発言を期待することもすくなくなかつた。それだけに期待を裏切られたひとびとがゾムバルト

を非難することも多かつたのである。が、いづれにしてもその学説は国境を超えて大きな影響をおよぼした。わが国でも、ゾムバルトの著書は大部分が翻訳または紹介されてきた。(その内容は木村元一『ゾムバルト「近代資本主義」および戸田武雄『社会政策の理想』などをみられたい。)しかしゾムバルトの全思想、全学説をそのまま継承して発展させる者がいなかったのは、最初にも述べたように、かれがながい間、ブレスラウに在り、またベルリンにもどつて後も商科大学に在職したために、ベルリン大学を中心として発達した、いわゆる官学派の学者からは異端視されざるを得なかつたばかりでなく、教え児の大部分が実業界その他に入り、学究生活に入るものがほとんどいなかつたという事情もあるが、しかし概念を絵画になおす芸術家肌の学風、ゾムバルト独自の「理論と歴史の統一」が、後継者による学派の形成をさまたげたことも大きな原因であるように思われる。ゾムバルト没後わずかの年月しか経っていない今日現在の時点で彼の経済学史上の地位を正確に定めることはできないが、ゾムバルト研究上重要な二、三の文献をあげて、参考に供したい。(いままでに掲げたものは除く。)

(1) ゾムバルトの著書論文、研究論文の目録は、
Georg Weipert: Art. "Sombart," im Handwörterbuch
der Sozialwissenschaften, 1938. に詳しく。

(2) わが国の研究文献としては、まず戸田武雄教授
の労作を適当な参考文献としてあげなければならぬ。
ひとつは『社会政策の理想』(有斐閣、昭和十四年)に収
められた「訳者序説」、もうひとつは『ウェーバーとゾ
ンバルト』(有斐閣、昭和二十三年)、さらに第三に河出版
『経済学説全集』第五卷『歴史学派の形成と展開』(大
河内一男編)の第五章におさめられている「ウェルナー・

ゾンバルト」(昭和三十一年)である。

(3) 東洋経済新報社版『経済学大辞典』におさめら
れているところの二論文。

a 村松恒一郎「発展段階説」(第二卷一〇九頁以下)。

b 高島善哉「経済体制」(第三卷四一一頁以下)。

(4) 英文では M. J. Plotnik: *Werner Sombart and His*

Type of Economics, 1937.

(5) ゼイツ文では G. Weipert: *Werner Sombarts*

Gestaltidee des Wirtschaftssystem, 1953.

(一橋大学教授)